

ウィゼンショウに住まう

ドリーン・マッシー*
(加藤 政洋** 訳)

Doreen Massey

Living in Wythenshaw

in Borden, I., et al., *The Unknown City: Contesting Architecture and Social Space*. MIT Press,
2001, pp.459-475.

非物質的な建築

場所とは、社会諸関係の空間である。ここではマンチェスターの南郊、都心からマージー川を越えたところに位置する公営住宅団地を取り上げてみた。そこは他の多くの団地と同じように、ごくありふれた場所である。

わたしの両親はここで 50 年近く暮らしており、またそれよりもずっと以前からこの場所については知っていた。半世紀以上に及ぶ二人の生活は、この場所で営まれると同時に、この場所を形づくっている。両親とこの場所、またその相互（「場所」と「人びと」）の関係性は、時とともに変化し、適応し、そして順応してきた。わたしがこうして文章を書いている今、病身の母は、かつて姉とわたしが通っていた学校の「跡地」に建つ介護施設に入所している。

両親は、団地が建設される前から「ここ」によくやって来ていた。週末、川やなだらかに起伏する農地のあちこちを歩くのである。マンチェスターの労働者階級にとって、ウィゼンショウに行くことは、健康的な散歩であり、マージー川南部の楽しい一日の過ごし方であった。若者たちの生活は当時、まさに空間的に制約されていたといつてよい。というのも、現在とは異なり、バスで町に出たり、海岸で週末を過ごしたりする生活とは無縁だったからである。それゆえ、週末に田舎の空気に触れながら散歩することは、生活の空間性を真に拡張することでもあった。

数年後、今では成長した二人の娘とともにあの農地に開発された団地に暮らしながら（しかし、木々はまだ残されており、それら木々の生長はまだじっくりこない新しい住宅と対照をなすと同時に、この場所がかつてまったくべつの場所であったことを想起させもした）、両親はこのまったく同じ場所を空

間的にいっそう拡張された生活の本拠地としたのである。両親はここから慣れないロンドンへと出かけ、時には海外へと旅をし、すでに家を離れていた娘たちを訪ねることもあった。ここは、クリスマスの週末、わたしたちが集まった場所でもある。

老いは再び閉塞——物理的な空間性の縮小——をもたらす。肉体には限界がある。病気や老衰は高齢者の生活に関わる空間を閉ざす。わたしの母は車いすを離れることができず、視力もひどく低下している。近年では一度だけ、彼女は午後の中歩いたり車いすに乗るかして介護施設を離れたことがあった。「ここからだとなイン山脈が見えるわね」と、よく言っていたものだ。あなた方はそちらに目を向け、そして夢見ることもできるだろう。だが、わたしの母の目はもはやそんなに遠くまで見ることはできない。父もまた、毎日毎日母のそばにいてあげたいと思いながらも、もはや車を運転することはできず、歩き回ることも困難で、晩年の空間性が縮小することを感ぜながら、またべつの新しい、そして今度はさらに田舎の住宅地に落ち着きたいと考えている。まるで二人の生活が呼吸をしているかのようだ。二人の生活の場としてのこの場所は、それに見合うように形づくられていた。

だが、もちろん、二人の生活——わたしたち皆の生活——は、物理的なモビリティの地図にもとづいて考えられるよりも、もっとずっと複雑な空間（時間—空間）のただなかで営まれている。今でも、高齢者の空間は休暇や旅の思い出によって引き延ばされ、家族や友人の訪問によって押し広げられ、他の人びとの生活ぶりを伝える新聞やテレビによっていっそう拡張されるのである。そして、この空間の時間 times も多様なのだ——結び合う記憶、重なり合うイメージ、次の週末へのひそかな期待。

* オープン大学

** 立命館大学

* * *

移ろいやすく複雑な個人のマイクロな空間性は相互に結び合わされているが、そればかりか、いっそう幅広い社会史のなかにも置かれている。それはまた、社会空間の形成と再形成の歴史でもある。ここ100年以内に、「この場所」は排他的な地主制から都市社会主義 *municipal socialism* を経て新自由主義的に私有〔民営〕化する試みへと推移してきた。個々の生活の呼吸は、広範な社会的キャンパスの上でこの場所を形成・再形成してきた社会的再構築のプログラムとの対位法のなかでなされてきたのである。

マンチェスターの労働者階級が逃れようとしたのは、封建主義の遺制とでもいうべき社会形態であった。チェシア北部にまで広がるほとんどの地所が、いまだに地主の手にある。彼らの土地所有の系譜は11世紀にまで遡ることができる。くわえて、傑出した者たち〔の名〕は、地名や組合〔の名〕に、いまだ見いだされるのだ。(わたしがよく行った土曜の昼から興行する映画館——タットン *Tatton*——は、少なくとも900年前にこの地で力をもった一族の名に由来する。)

ウィゼンショウが建設されたとき、この場所の自然は見る影もないほどに変貌した。巨大な公営住宅団地(人口10万、世界最大)は、かつて散在していた農場や小さな村落、そして広々とした農村地帯にひろがっている。しかし、この空間を構築した社会諸関係の変化は、なおのこと大きかったのである。固定された社会階梯における差異の諸関係と自分の位置を知るための諸関係は、権利——健康と質のよい住宅に対する労働者階級の人びとの権利——の主張から強力に打ち立てられた自治的な建設計画に丸のみされたのだった。新しい住宅団地というまさしく物理的な構築物は、それが位置する場所の社会原則を主張したのである。それは新たな社会的場所——自治田園都市——の誕生を意味していた(実際、ウィゼンショウが最初であったと言われている)。労働者階級向けの質のよい一戸建て住宅の新しい建築は、社会諸関係の新しい建築でもあったのだ。

近年、より広範囲の社会計画によって、この住宅団地は再び変貌しつつある。民営化という国家的な〔政策の〕転換は、ここでは強い抵抗を引き起こした。だが、それは都市社会主義、プランニングへの参画、社会的支給の保証レベルを弱めたのである。このとき、建造形態と社会諸関係との調整はこれまで以上に微妙になり、いっそうの多様化を見せたのだった。全面的な建て替えがなされなかったとはい

え、社会環境の変化は、物理的な細部と社会的な意味の双方を組み替えた。ばらばらに販売される住宅は、物的な様相のみならず、場所の社会的な意味・感覚をも変えたのである。同じつくりの住宅には、今では私有であるという徴がある。張り出し玄関、思い思いの煉瓦塀、いろいろな表玄関のドア。わずかな物的改変は、ちょっとした社会革命の証左となる——自分の誇りと個々の想像力を表現する新しい能力、そしてまた「労働者階級」や「公共」といった古めかしい一貫した見方の粉碎。

わたしのような福祉国家世代が前提とする(そしてわたしたちの親の世代が勝ち取った)セキュリティは、ある種の神経質によって打ち砕かれてしまった。この点は街頭でそれとはっきり指摘することは難しいけれども、すぐに感じ取られるものだ。時おり、団地の残りが売却されて人手に渡りそうである、あるいは住宅組合へ売却される、といった脅威をもたらすような悪い噂が流れる。以前の確固たるセキュリティは、まさに建物でも立っているかのようであったが、現在のところは脅かされているように思われるし、そこに踏みとどまろうという人も揺れている。物理的に団地はまだそこにあるのだが、それが持つ意味は——つねにほんの少しずつ——変わっているのである。そして今では新しい建物もあり、それらもやはり変化をもたらす存在なのだ。わたしの母が居る介護施設は、かつて姉とわたしが通った学校の跡地を利用して建てられている。その(ふるくは封建制下の畑地であった)土地に位置した学校は公立であったが、〔現在その跡地に建つ〕介護施設は、ある商社が所有している。このようにさまざまな点において、物理的な建築ならびに社会諸関係という非物質的な建築における諸変化は、相互に交差しつづける。

* * *

社会諸関係、広範な歴史的移行、そしてつねに異化しつづける個々の日常生活の空間性の交差は、ある場所が意味する内容、すなわちそれがひとつの場所として構築される方法を何らかのかたちで示している。(そのような見取図を書き上げることには終わりがなくであろうし、よりいっそう複雑に描き出されることになろう。)しかし、特にいくつかの事柄が強調するに値すると思われる。まず、どのような場所にも空間時間性 *spatiotemporality* という開かれた複雑性がある。わたしの両親の生活が閉塞していくように、団地の新しい世代は一様に外へ行く

ことを控えている。空港の補助的な滑走路は、その役目を終えた。終日、飛行機が屋根の上を飛んでゆくことはほとんどなく、その滑走路は、車椅子を使用する人向けの「ロカライン Localine [ローカル線]」のバス停の役目を果たしている。高齢の住民は、来る日も来る日も屋内で過ごし、さほど遠くはない南側のジョドレルバンク天文台へ星を見に行くこともない。また、時間と時間性には多様性がある。この「地点」、この「立地」は、諸時間と諸空間からなるひとつのパリンプセストなのだ。経度と緯度という見かけの確信は、モビリティと多様性を束縛し、空間と時間の確実性をすっかり覆い隠す。

それゆえ、建物の見かけの固着性に関わるのは、「建造環境」の所与性にほかならない。この「所与性」は、人びとのアイデンティティと場所のアイデンティティの不断の相互構築過程において、たったひとつの契機にすぎない。したがって、社会諸関係の凝結たる建物は、社会諸関係によって改変されつづけると同時に、社会諸関係のなかで生きつづけるのである。都市という「建築」は、それを通してわたしたちが生活をし、わたしたちが適応し、さらに構築・再構築する、社会諸関係の枠組みなのだ——それこそが、わたしたちの空間時間性にほかならない。社会諸関係の空間は、ちょうど建物が建設 construct されるのと同じように、構築される construct ののである。社会諸関係の空間は、建物と同様、改変され得るのである。それらは、建物が物質的であるようには「物質的」ではないけれども、通り抜けることのできない壁にもなり得るのだ。

実践された場所

これは非物質的な建築、すなわち社会諸関係の建築である。ただし、社会諸関係は実践され、また実践は身体化されているのであって、つまるところ物質的である¹⁾。場所とは、物質的な実践の所産にほかならない。

距離をおいて見るのでないかぎり、このことは容易に想像できる。空間性は、音・触感・におい——視覚以外の他の感覚——によっても構築される。介護施設の周囲を車いすで散歩すると、自分がどこにいるかがおいでわかる（ちょうど調理場、あるいは理髪専用の部屋を通過しているのだらうと）。突然何かのにおいを感じると（庭のラベンダーの花壇かもしれない）、あなたの気持ちはどこか遠く、別の時間と場所に運ばれる。散歩道の変わりゆく〔地

面の〕感触は、車いすを通してあなたの体のなかに響きわたる。ガタゴトの砂利道から滑らかなアスファルトの通路へ出たときの安心感。音響や雑音は空間を閉ざし、邪魔をしたり脅かしたり、あるいは空間に形や方向性を与えることもできる。アンリ・ルフェーブルは、「……沈黙は、音楽性をもっている。修道院〔の回廊〕や大聖堂の中では、空間が耳で測られる」と記していた²⁾。視覚以外によって感覚される、局所的な景観もあるのだ。音と触感の都市を、あらゆる感覚に働きかける都市を想像——デザイン——してみたいものである。

* * *

この団地の誕生は、実際のところ、身体と大きく関係していた。マンチェスターは、はちきれんばかりに膨脹していた。さまざまな報告書が、最下層 cellars に暮らす 15,000 もの人びと——都市のいわゆる穴居人 cave-dweller [過密なアパートに暮らす人びと]——の存在を指摘している³⁾。スラム的状况はすさまじく、住民はしばしば短命で、疾病は蔓延していた。これは、エンゲルスの〔描写した〕マンチェスターのほんの一部に過ぎなかった。

マージー川の南部には、べつの世界があった。「ウィゼンショウの父」と称されるウィリアム・ジャクソンは、16歳の時にマンチェスターに移り住み、後に「ゴートン、オープンショー、そしてアードウィックのスラムを見たときの驚き」を回想している⁴⁾。彼がスラムに対して払った注意は、市の良心を狼狽させ⁵⁾、そして衛生委員会の一員として彼はウィゼンショウの新鮮な空気を発見したのである。「新鮮な空気」は当時、都市と身体に関わる議論では決定的に重要であり、(結核の療養のための)バグリー・サナトリウムが早い段階で設立されたことは、マージー川南部の「健康な、つまり汚染されていない空気」を証明するものであった⁶⁾。この住宅団地計画のまさしく最初の段階から、低密度の住宅供給、この土地本来の木々や池の保護と並んで、煤煙の規制が強く主張されたのである。

この展望は、社会的であると同時に物的な側面も持ち合わせていた。ウィゼンショウ選出の労働党議員を長年務めたアルフ・モリスは、建設が始まった1936年にこの地を初めて訪問した印象を次のように記している。「今でもなお、わたしはマンチェスターの旧市街と新市街の著しい違いが鮮明に思い出されます。マラソン競争のような旅の後、わたしは自分が目にしたものに驚嘆しました。それは、夏の

ことで太陽がまぶしかった。この新しいマンチェスターは緑にあふれて気持ちがよく、広々として忘れることのできない場所でした」⁷⁾。

ウィゼンショウは今でも緑にあふれ広々としている。澄んだ空気、新鮮なそよ風（恒風）に、わたしは訪れるたびに今でも心を洗われるのである。

* * *

だが、他の身体化された社会的実践は今日、この場所をかなりちがったものになっている。実践が見いだされるのは、より日常的でより微細なレベルにおいてである。場所は形成されつつける。あの開放的な新鮮な空気は、数限りない日々の実践のなかで閉ざされる可能性もある。公共部門の縮小によって、敷石が割れたり、重なり合っ角が割れたりしている。すると、車いすはがたつき、患部にはつらく骨に痛みがはしる。足もとがおぼつかなければ、それは小さなアルプスのようなものだ。このことは、わたしたちの空間性の領野を制限する。あなたは（と、わたしの父が言う）歩くときには足もとに気をつけていなければならない。お店に出かけるというごくありふれた実践の空間性は、すっかりその姿を変えてしまう。まさにこれこそ、あなたがこの場所を構築しているということなのだ。この点に関するあなたの知識も変化することだろう。あなたは木を見上げることもなく、あるいは清々しい空気を吸って気持ちよく歩くわけでもない。あなたは自分の足もとに注意を集中していなければならないのだ。あなたの空間性は閉ざされる。このように身体化された実践によって、場所は経験され、感知され、そして形成されるのである。

けれども、さまざまなかたで「ひとつの場所」を知ることができる。たとえば、空間と場所の物的な領有をめぐる日々の闘争がある。時には敵対的に、また時には許容できる和解の糸口を探るために、立場を入れ替えてみるとよい。自転車やスケートボードに乗っている子供たちは、街路や歩道の自由を求める——そして、このことは外出を危険な冒険にかえる。わたしの父は、歩道の中央を決して歩かず、つねに片側を歩くという空間的戦術を編み出した（内側の端がもっともよい）。すぐにわかるように、あなたの側を自転車が通行するだろう。スケートボードは「対抗文化的な諸実践」を身体化するかもしれないが、他者の空間を領有する行為も容易に可能としてしまう。

空間に対する差異化された要求は軋轢を生じさせ

るのだ。つまり、示差的な空間的権力は、まさに路上で対峙するのである。そして時に、この対立はより明確な敵意となる。公共のベンチは破損され、ローンボウリング場は閉鎖され（開くためには24時間体制の守衛が必要になる）、不法侵入を防ぐ目的で台所の窓には鉄格子がはめられる。だが、洗い物をしている時にそれを目の当たりにすれば、閉じ込められているような気分になるだろう（それは視界も悪くする）。暴力は、夜間の外出を押しとどめることにもなるはずだ。都市という完全に物質的な空間は、結果としてプランナーが思い描いた夢とはべつなものにつくりかえられる。この団地の一角にある場所もまた、差異化され、実践された諸々の空間性のあいだで絶え間なく繰り広げられる——週単位の、日々の——折衝の所産というほかはない。

空間／権力

ひるがえって絶え間のない折衝はまた、空間／場所が社会的権力の所産であること、またそれらが社会的権力に染め上げられていることをも意味している。わたしの両親の生活の空間性は、示差的な権力によって空間化された社会諸関係の格子のなかで折り合いがつけられたものと言えよう。

そのような制限のなかには、わたしたちが一様に「あいつら them」——「資本主義」ないし「トリー党」——のせいにしてしまうものもある⁸⁾。たとえば、乏しい国民年金、低レベルの社会サービス、財政難の公共交通機関（たとえ目指す方向が違ったにせよ、「ハイテク」が高齢者や障害者のモビリティになし得たことを考えてみるとよい）、壊れたままの敷石。これらすべてが制約の確固たる枠組みを形づくる。それらは移動を制限し、文字どおりあなたの空間を閉塞させ、空間的な自由と安心をはっきりと感じることのできない状態に押し込めてしまうのである。

だが、ことはより複雑だ。というのも、この団地の造成それ自体が闘争の帰結であったからだ。しかもそれは、強力な地方国家（マンチェスター市）とチェシア州北部農村の地元住民とが対立する闘争であった。住民と対立するプランナー。市民と対立する国家。すぐれて現代的な討論に典型的な用語は、すんなりとあるべきところにおさまる。支配と抵抗、戦略と戦術⁹⁾、システムと地元の人びとの対立、というわけだ。

そのようにロマン化された分類／同定は、ここで

はまるっきり見当違いであろう。国家、プランナー、システムは、さらなる、いっそう健康的な、都市の労働者階級のための空間を勝ち取るために闘っている社会主義者や進歩主義者からなる集団である。「地元の人びと locals」とは、比較的小数の村民、マンチェスターに通勤している多くの人びと、そして大土地所有者の連合であった。

通勤者たちの生活はマンチェスターに依存していたが、自らの大きな収入の帰結——高い住民税、貧困層のあいだで生活する必然性——に関心を持つとはしなかった。「住民闘争」の中核となる行政区のうち三つの区で行なわれた世論調査では、区民の82%がマンチェスターの進歩に抵抗したいと考えていることが明らかとなった。だが、そのうちのおよそ半数がそこで働いていたのである¹⁰⁾。

広大な土地を所有する地主たちは、その系譜を数世紀もさかのぼれることがしばしばだ。そしていまだに、封建制の根深さと敬意の見込み以上に、(空間化された)社会諸関係の頂点で生活している。最近の文献では、「支配」とはつねに対抗すべきものであるということを前提に、またわたしたちがレトリックを編成すれば抵抗者の代わりになるということをそれほど深く考えずに受け入れ、「抵抗」をほめそやす傾向にある。おそらくこのことは、いまのわたしたちにはほとんど力がなくて感じていることに起因するのだろう¹¹⁾。いずれにせよ、わたしたちに権力の責任について考えることを躊躇わせているのは、あるひとつの前提である。それは、「権力」と言えば必然的にネガティブなものを読み替える思考法にほかならない。そして、多くの誤解がある状況へといたらせてしまうのは、往々にしてひとつの前提なのだ¹²⁾。

ここチェシア北部で、「地元の人びと」という衣装をまとった国家に対抗する反政府主義者は、財産や特権を含めた地元の生活様式の擁護者であった。もしあるとしても、抽象的ないし普遍的な「空間的規則」はわずかである。地元の人びとは、たとえ「反政府主義者」であるとしても、つねにもっとも進歩的な価値の持ち主というわけではない。空間と場所をめぐる闘争——社会空間的諸実践に埋め込まれた時に相反する闘争——は、つねに空間化された社会的権力をめぐる(たいていのところ複合的な)闘争である¹³⁾。個人的には、地元の者の多くが去り、ウィゼンショウの団地が建設されたことは喜ばしいことである。

闘争線は——公開討論では実際の動機にならないにしても——、この場所の意味をめぐって正確に引

かれていた。相異なる土地に根ざした知が対峙したのである。進歩的なプランナーは時おり、カナダやオーストラリアにおける英国の植民地化の推進者のそれとほとんど代わらない態度を示した、と言っておかなくてはなるまい。彼らは在来住民を見なかったにすぎない。ここは開発するにあたって機が熟した、開かれた空間だったのである。マンチェスターの住宅供給事業にウィゼンショウが適合するかに関するアバーンクロンビー・レポート〔Abercrombieは英国の都市計画家〕は、ここには「命ぜられればいかなる形態をもつくりあげることのできる処女地があり」、「開発の進め方に干渉したり指図したりするような集落やまとまりのある大きな住宅群は存在しない」と記している¹⁴⁾。だが、いうまでもなく、真に処女地である土地など存在しない。そしてこれら地元の人びとは力があり、抵抗したのだった。だが、その抵抗の空間的語彙は、マンチェスター側のその場所の解釈に比べて、ほとんど説得力をもたず、あまり感心できない意図で染め上げられていた。闘争のスローガン「チェシアはチェシアとして保持されるべき」¹⁵⁾は、まさに静止としての保全に訴えている。それは、議論の欠如だけを指し示すにすぎない。(だが、左から右にいたるすべての政治分派、そしてあらゆる種類の「地元住民」たちから繰り返されるその言葉をどれほど聞かされていることか。)¹⁶⁾

そして、団地〔の開発〕は開始され、プロジェクトは観念論〔理想主義〕によって、すなわち公共部門が最もよいものになるという理念によって推進されたのである。

* * *

この場所の意味、それがどのように知られているのか、特定の諸空間への権利、そして誰の権限がどこを支配するのか、これらをめぐる折衝が今日までつづいている。住民自身が、権力の程度に差異のある空間化された社会諸関係という微細に織り合わされる日々の折衝のただなかで、今日の団地づくりを引き継いでいる。なかには積極的な攻撃もある。それは破壊行為や暴力で、必ずしもあなた自身が直面するわけではないが、目に見えて身近な存在である——閉鎖されたバスの待合所、台無しにされた苗木(進行中であるべつの議会政策)。その存在が意味するのは、さまざまな点であなたの空間性を閉ざすということである。また、まったく敵対的ではないのだが、いまだに権力で満たされた試みも存在してい

る。それは、スケートボーダーと足もとのおぼつかない高齢者、市と国の対立によって乳母車のまま路上に追いやられた子どもたちなど、空間に対してひじょうに分化した要求を有する——場所を問わない——人たちからなる一集団の、ともに暮らすという試みである。建設されたこの団地が誰にとって「公的」であるのかは、多様でありなおかつ差異化されていることがわかる。つまり、空間に対する多様な要求があること、そこに異なる意味を付与していること、差異をつくりだそうとしていること、そして時には相反する場所であること、など。すると、「公共空間」とは注意を要する概念であることがわかるだろう。また、「支配」と「抵抗」といった二項対立の概念は、さまざまな空間性がこのように交差するなかで破綻するのだ。

空間／アイデンティティ

このような交差のなかで、アイデンティティが形づくられる。あなたの空間性はあなたを「定位 place」することができる。場所は、あなたが何者であるのかをあなたに部分的に物語る。

だが、この——個人のアイデンティティと場所のアイデンティティの間の——関係を構築する方法は多様である。たとえば、連続性としての場所があるし、また不朽の故郷としての場所もある。だが、そのどちらも困難を表わしている。

お望みとあらば、わたしはこの場所についても、長い歴史的な連続性とある種の「故郷」をめぐって織り成されるその種の物語をお話しすることができる。『祖国の暮らしについて』のなかで、パトリック・ライトは標準的な行政区の歴史の構成を持ち出している。それは、ドゥームズデイ・ブック(初期の住人に関する簡単な調査に由来する)にはじまり、さまざまな時代を経て今日にいたるまでゆるやかに単線的に進行する¹⁷⁾。次のようなことをあなたはご存知だろうか？ オズバート・ランカスターは、『ドレインフリートの啓示 *Draynefleete Revealed*』のなかで、このジャンルを皮肉っている。

ドレインフリートほど長く連続した歴史を誇る町が、イングランドでほかにあるのだろうか。その最初期から人類のひとつのあるいはまたべつの居住地は、ドレイン川の北岸沿いに集中していた。それは、浅くても危険が潜むこの川の流れを楽に渡ることのできる最も高い地点である。あるいは

それ以前でさえ、とはいえ実のところそれを指し示すものはあまりないのだが、そこに川が流れる前にも、つまりフランスとイギリスが陸橋によって結ばれ巨大なマンモスや剣歯虎〔化石獣〕が現在マクス・アンド・スペンサー Marks and Spencers〔小売店チェーン〕の立つ場所で熱帯性の下草のなかをうろついていた時でさえ、原始人たちはここに居住していたとも考えられるのである。¹⁸⁾

ドゥームズデイのチェシア北部への参入は、接続と連続性でわたしの心をときめかせる。1066年以降の土地の再分配で得をした〔1066年にイングランドを征服した〕ノルマンディー人の地主の一人こそ、ほかでもないハモン・ド・マッシー Hamon de Massey であった。道をあがったところにダンハム・マッシー Dunham Massey と呼ばれる場所がある。それどころか、タットン家は1370年、ロバート Robert のアリシア・ド・マッシー Alicia de Massey との婚姻を通じてウイゼンショウを獲得したようなのだ¹⁹⁾。父系制でなかったとしたら、映画好きの子どもであったわたしが通ったのは、タットンではなくマッシーであったかもしれない。

実際には——今ではわかっているのだが——、ここにはなんら連続性がなく、また血統のつながりもない。「ホーム」の構築が、ある場所の範囲の連続的な時間の流れをたどることによって達成されることはまずない。場所への愛情は——「属する」という感覚さえ——、ルーツというロマン主義や、途切れのない、空間に種別的な家系にもとづいて構築される必要などまったくないのである。

むしろ、場所があなたのアイデンティティについてあなた自身に教示するのは、べつの方法においてである。あの敷石があなたに自分の弱さを気づかせる。それらは能動的に、物質的に、あなたを無力にさせる。物的環境における変化は、あなたの時間が過ぎ去ってゆくことをあなた自身に語りかけるだろう。安全対策のための立ち入り禁止が、かつてよく利用したが今では閉まっている店を見えなくしている。建造空間が、他の、より新しい願望に応じて変化するとき、その結果として生じる排除はあなたが何者であるのかをあなたに語りかけるだろう。あなたは、あの店にハイファイ装置やコンピュータがどのように運び込まれたかさえ知らないはずだ。まさしくその排除がアイデンティティの形成なのである。敵意なしに、ただあふれんばかりの新しさとともに、あなたの世代（それ自体、以前は不快感をあ

たえるものであった)によって、そしてあなたの世代のために構築された場所は、あなたが完全に理解することのないべつの世代に引き継がれてゆく。

ルフェーブルは周知のとおり、次のように述べていた。すなわち、

記念建造物の空間は、社会の各成員に、その社会に帰属しているというイメージと自己の社会的様相のイメージをあたえてくれよう。だから空間は、個人的な鏡よりもはるかに「忠実な」集団的鏡なのである。この鏡の承認効果は、精神分析家の「鏡の効果」よりもはるかに重要である。…〔中略〕…したがって、記念建造物は一定の「合意」を実現した。それは合意に効果を及ぼし、合意を実用的で具体的なものにした。²⁰⁾

強い印象をあたえる壮大な記念建造物が、実際のところのように印象的であり得るのかについては議論がある。しかし、ここではこの団地に関する洞察の方向性を転換することができる。というのも、そもそもこれらの空間は記念建造物とは明確に区別されるものだからである。さらに、そのほとんどが、選択的に歓迎もすれば、拒絶もする。商店街を歩けば、時には惹かれ、ある時には拒絶され、また別の時にはもっとあからさまに排除されていると感じる。その帰結は各々で異なるだろう。日々の生活の空間・場所において、ここは代わる代わる包み込んだり拒んだりするような「鏡」である。共通の属性、共有されるアイデンティティというコンセンサスに集約することを目的とする記念建造物とはちがいが、歩く人のすべて、平凡な空間の多様性が、差異化と破碎の事実を映し出す——あなたが行くであろう場所もあれば、行かない場所もある。記念建造物の空間は、共通の仲間についてあなたに語りかけようと(教え込もうと)する。記念建造物ではなく、わたしたちがより習慣的に暮らしている空間こそ、あなたが属している場所についてより正確に語りかけるはずだ。(実際のところ、記念建造物の空間は、他の諸空間があまりに選択的に歓迎もすれば拒絶もするという、まさにその理由から、必要とされるのかもしれない。)これらの事物は、より広範な事物の体系のなかで、あなたが誰であるのか、あなたが社会にどのように関わっているのかを理解するための手助けとなる。それゆえ、空間性は文字どおりあなたを定位するのだ。それらは、あなたに相応しい場所を語り、あなたの相対的な権力を教えてくれる。

* * *

わたしの両親——80代の「労働者階級」——のような人たちにならって言えば、多くの都市は、いままさに進行中であるところの縁辺(社会の周縁)にあなたが住んでいるということを語っているのではないか、とわたしは思うのである。他者とますます手に手をとりあい、現在の世界を注意深く歩んでいるのではないかと。ポストモダン大都市の空間に掲げられた鏡は、多くの高齢者に対して、あるイメージを映し出す。鏡のなかに彼ら彼女らの姿が映し出されることはない。林彪 Lin Biao だけがエアブラシで消されている、中国の写真のあの一枚のように。

だが、あまりにネガティブであるが——けれども、またもや——権力と空間のパターンを簡略化しすぎてしまう。ルフェーブルもまた以下のように記している。すなわち、

社会的空間が禁止の場であるのは、まぎれもない事実である。というのも、社会空間には禁止、禁止に類するもの、規範が満ちているからである。だがこの事実にもとづいて包括的な定義を引き出すことはできない。というのも、空間はたんに「ノン」の空間ではないからである。それはまた身体空間であり、それゆえ生を肯定する「ウィ」の空間でもある。²¹⁾

実際、わたしの両親は二人とも受け身ではない。そうしたなかで、彼らは皆、そして彼らのような人びとは、なんとかやっていける空間を切り開きつづける。彼ら彼女らは場所を形づくりつづけるのだ——車いすを使用する人、あるいは野原でピクニックをする人たちの局所的な空間。わたしたちがおしゃべりをしている夕暮れ時、長い旅の思い出、たまに訪れた外国の思い出から、その空間が起ち現われる。そのなかでも、いまだに描くことも、ましてや見分けることも困難な空間がある。社会諸関係の空間だ。この一角の人びとは、互いに相手のことを気にかけている。近所の人たちは、父の家のカーテンが毎晩きちんと締められているか、朝には開けられているか確かめる。牛乳が取り入れられているかを確認する。

追想

本稿の時制はばらばらである。わたしが執筆している間に、父、そして母が相次いで亡くなった。誰もいなくなった家には、板張りがされた。ガレージは破壊され、表の門は盗まれ、玄関のドアにはいたずら書きがある。記憶の諸層は、建造空間に埋め込まれる。家の遺棄は、まさしく記憶の媒体を脅かす契機となるらしい。すべてここ数ヶ月のことである。

しかし、わたしたちは近所の人たちに会いに帰る。姉とわたしが到着すると、みんな挨拶しに出て来てくれる。まだそこには、笑いや地元のうわさ話がある。そこにいれば、再び思い出を喚起する物質性の力を感じ取ることだろう。ざらざらの煉瓦の感触、イボタノキの生垣に手を触れたときの刺激、かわることのないそよ風。そして現在、家は修繕され、新しい人たちが入居した。「また二人娘ね」と言って、わたしたちは笑った。この団地の形成はつづいてゆく。

注

- 1) See Nigel Thrift, *Spatial Formations* (London: Sage, 1996).
- 2) Henri Lefebvre, *The Production of Space*, trans. Donald Nicholson-Smith (Oxford: Blackwell, 1991), p. 225. [アンリ・ルフェーブル著、斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店、2000年、329頁]
- 3) "Toward a New Wythenshawe: Dreamers and Schemers, Plotters and Planner," in *Wythenshawe: The Story of a Garden City*, ed. Derick Deakin (Chichester: Phillimore, 1989), p. 25.
- 4) William Jackson, quoted in *ibid.*
- 5) "Toward a New Wythenshawe," p. 25.
- 6) Abercrombie Report, quoted in *ibid.*, p. 28.
- 7) Alfred Morris, M. P., preface to Deakin, *Wythenshawe*, p. x.
- 8) 本稿は、トーリー党の変種〔保守党〕が政権を取って「あいつら」だった時に書かれたものである。いま現在、新労働党がこの団地の住民に「わたしたち庶民」の側なのか、それとも新車の「あいつら」として理解されているのか、いまだ見極めがつかずにいる。
- 9) See Michel de Certeau, *The Practice of Everyday Life*, trans. Steven F. Rendall (Berkeley: University of California Press, 1984). [ミシェル・ド・セルトー著、山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社、1987年]
- 10) "The Five Year War: 1926-31—From Parkland to Parkerland", in Deakin, *Wythenshawe*, p. 44.
- 11) 抵抗の言語と左派のあまりの無力さとういこの現在の組み合わせを1960年代・1970年代の状況、あるいは1980年代初頭とさえ比較してみたくなる。当時、さまざまな装いをまとった「左派」は、(国家という形態のなかで) 権力を保持すると同時に、それに対する責任を負い、決定をくださねばならなかった。ここでわたしが想起しているのは、いくつかのヨーロッパ諸国におけるさまざまな地方国家で政権をにぎった左派のみならず、南のいくつかの国(モザンビーク、キューバ、アンゴラ、ニカラグア……)も含まれている。
- 12) マンチェスター空港に建設される予定の第二滑走路は合意がとれているものの、市の計画に反対する別の複雑な同盟も存在する。ポリンヴァレーは都市の新たな緑辺となりつつあり、(ウイゼンショウが建設されてからというもの) 日曜日の午後、現在マンクーニアン〔マンチェスター住民〕が散策する場である。
- 13) Doreen Massey, "Making Spaces: Or, Geography Is Political too," *Soundings* 1 (1995): 193-208.
- 14) Abercrombie Report, quoted in "Toward a New Wythenshawe," pp. 27-28.
- 15) "The Five Year War," p. 48.
- 16) この社会物語には、二つの注目すべき例外があった。アーネストとシーナ(後のロードと夫人)サイモンは、比較的最近の土地所有者であった。二人は自分たちでウイゼンショウ・ホールと250エーカーの土地を購入した。どちらも、精力的かつ有力な社会改革の運動家であり、ホールと土地を市に寄付したのである。今日にいたるまで、この土地の利用については制限がかけられており、「住民に対する」寄付であることが、はっきりと示されている。ウイゼンショウのロード・サイモンとサイモン夫人と言えば、その歴史を知る団地の住民たちのあいだで、いまだ称賛をもって語られている。
- 17) Patrick Wright, *On Living in an Old Country: The National Past in Contemporary Britain* (London: Verso, 1985).
- 18) Osbert Lancaster, *Draynflote Revealed* (London: Murray, 1949), p. 1.
- 19) "Chronicle of Notable Events," in Deakin, *Wythenshawe*, p. xii.
- 20) Lefebvre, *Production of Space*, p. 220. [ルフェーブル『空間の生産』、323頁]
- 21) *Ibid.*, p. 201. [ルフェーブル『空間の生産』、297頁]